

ゾウ・シンポジウムⅡの開催にあたって

松岡敬二*

Introduction to the Elephant Symposium II: History and evolution of elephants

Keiji Matsuoka*

はじめに

豊橋総合動植物公園では、2011年9月17日に全国4例目となるアジアゾウが産まれた。無事成長を続け、1歳を迎える前に体重は400 kgを超えている。

2012年7月21日には、ゾウ・シンポジウムⅠとして「群れ飼育を考える」がドイツのケルン動物園の獣医師等を迎えて開催された。豊橋市自然史博物館では7月13日から9月2日まで、ゾウを含む大型の哺乳類化石を中心とした特別企画展「でっかい動物化石」と関連行事のワークショップ「ゾウのうんちペーパーをつくろう」(7月29日)、「ゾウを復元しよう」(8月19日)が行われた。豊橋総合動植物公園内でゾウへの関心が高まる中、豊橋市自然史博物館の展示や機能・役割の周知と、長鼻類の進化や国内ゾウ化石の現状について情報提供する目的でゾウ・シンポジウムⅡ「ゾウの歴史をさぐる」を開催した。

本論は、ゾウ・シンポジウムⅡで趣旨説明した内容、日本への象の伝来、豊橋と象、博物館とゾウについてまとめたものである。

日本への象の伝来

象という動物は、飛鳥時代(592–710年)に仏教絵画として伝わっている。

奈良時代(710–794年)には、象牙が輸入されるようになり、象牙加工が日本国内で始まっている。当時

の輸入品は、奈良県の正倉院御物の中に見ることができる。その一つ五色竜歯は、象の臼歯化石であり、薬の原料としての渡来品である(益富, 1957)。源順が承平年間(931–938年)に編纂した『倭名類聚抄』には、象のことが岐佐(キサ)として記述されている。同じ平安時代末の京都高山寺に伝わる絵巻物である『鳥獣戯画』乙巻には、写実的ではないが、象が描かれている。鎌倉時代(1185–1333年)の『釈迦三尊像』に描かれている普賢菩薩が乗っている霊獣は、3対の牙を持つ白象である。

生きた象が日本へ運ばれてからは、絵の写実性が高まっている。日本へ象が運ばれた明治時代以前の記録は、磯野(2007)ほかを参考にすると以下のようである。1408(応永15)年6月22日には、南蛮船が黒象(アジアゾウ)を積み福井県若狭に到着している。この黒象は、3年後には朝鮮王朝に献上されている。1597(慶長2)年7月24日には、豊臣秀吉にポルトガルのルソン総督が送った象が大坂に到着している。その後、京都の人たちは29日に象を見る機会に恵まれている。1602(慶長7)年6月24日には、現在のベトナム北部の交趾(コーチ)からの象が徳川家康に献上された。その象を家康は豊臣秀頼へ贈っている。1813(文化10)年6月28日には、イギリス船が長崎に到着したが、象ほかを受け取らず送り返している。しかし、『唐蘭船持渡鳥獣之図』をはじめとする図に多数描かれ、牝(雌)象の絵も残っている(磯野・内田, 1992)。

1728(享保13)年6月13日には、長崎にベトナム(広

* 豊橋市自然史博物館, Toyohashi Museum of Natural History, 1-238 Oana, Oiwa-cho, Toyohashi 441-3147, Japan.

原稿受付 2012年11月9日. Manuscript received Nov. 9, 2012.

原稿受理 2012年12月4日. Manuscript accepted Dec. 4, 2012.

キーワード: アジアゾウ, ナウマンゾウ, ゾウ・シンポジウム, 動物園, 自然史博物館, 豊橋.

Key words: *Elephas maximus*, *Palaeoloxodon naumanni*, elephant symposium, zoo, natural history museum, Toyohashi.



第1図.『電車唱歌かるた(仮称)』の絵札(へ)。

南)より牡(雄)・牝象が到着した。これは、1726年に幕府が清船主の呉子明に象の持ち渡りを命じたものである。しかし、9月11日には長崎の地で牝象は死亡した。牝象は、翌1729(享保14)年4月28日に京都に着き、官位「広南従四位白象」が与えられ中御門天皇に面会した。この面会の日を記念して、『象の日』としている。そして、5月25日に江戸に到着し、27日には吉宗に献上されている。このときの行程は、一日3～5里であった。この吉宗への献上象が、「享保の象」と呼ばれ、日本に“象さま人気”を巻き起こした。後に、飼育に経費がかかり、中野村の源助らに象が譲渡されている。1741年には源助の土地へ移され飼育されたが、1742年12月12日に死亡している。遺骸は、中野の宝仙寺に安置されたが、1945(昭和20)年の戦火で消失した。



第2図.象鳴き坂(静岡県浜松市北区)。

1863(文久3)年春には、新たに牝象が横浜に渡来し、江戸両国で見世物となっている。

明治時代になってからのゾウは、農商務省所管の博物館附属施設として1882年に開園した上野動物園への来園が初めてである。1888年にシャム皇帝より雌雄のゾウが送られたものである。『新撰東京名所図会』にある「上野公園の部」(下)を見ると1896年頃の上野公園動物園の図にはぞう舎が描かれている。ぞう舎のゾウがアジアゾウとわかる資料としては、柵越しに女学生とともに描かれている『電車唱歌かるた(仮称)』の絵札がある(第1図)。『電車唱歌かるた(仮称)』としたのは、読み札「博物館に動物園 パノラマ、美術展覧會 忍ばす地畔の 辨才天 四季の眺望も飽ぬ哉。」が電車唱歌と一致するからである。電車唱歌が作詞されたのは、1905年であるが、人気が出た1917年頃にこのカルタが発行されたと考えられる。

上野動物園では1930年代後半になっても、ゾウの曲芸は子どもに人気であった。動物園のゾウの位置づけは、戦後まで見世物として続いていくことになる。

豊橋と象

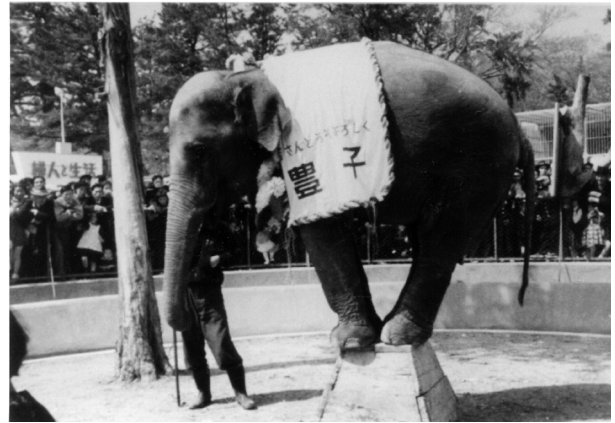
1728年に長崎に到着した2頭の象は、翌年牝象のみが、江戸への途上に吉田(豊橋)の北を通る姫街道を経由している。吉田宿、嵩山宿の街道筋の人たちは、吉田宿を通過する前から御触れにより、珍獣を見る機会に恵まれたようである。嵩山宿を通過すると、すぐに山中に入り、本坂峠、引佐峠を越えて、気賀宿へと至る。箱根峠の勾配の比ではないが、引佐峠の登り坂は狭く曲がり、象が悲鳴を上げたとされる「象鳴き坂」が残っている(第2図)。そこを越えるとすぐに、峠となる。峠から下っていくと右側前方に浜名湖の奥



第3図.引佐細江(浜名湖)。



第4図.『日本年歴一覧』の享保の象（豊橋市美術博物館蔵）。



第5図. 豊橋動物園のゾウ豊子（豊橋市広報広聴課提供）。

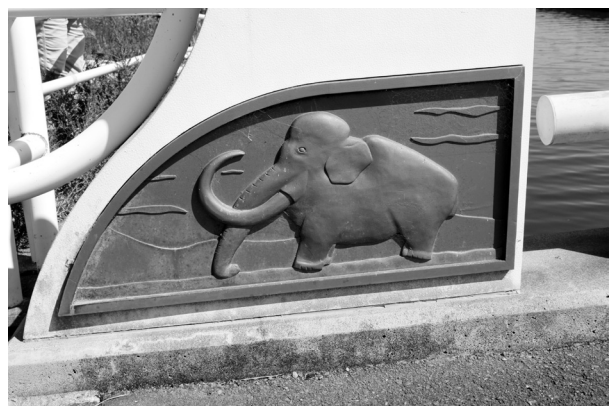
部引佐細江の絶景が広がり（第3図），象一行には一服の清涼剤になったと想像できる。この峠越えの陸路は，水を嫌う象のために東海道の海路を避けたためである。気賀宿本陣があった中村家には，姫街道の象一行の様子『象の行列図』『象小屋の平面図』が残っている（豊橋市二川宿本陣資料館，1999）。江戸に向って富士山の南を東進する象一行の様子は，小田切春江の『日本年歴一覧』に描かれている（第4図）。

豊橋の人がゾウを広く見る機会に恵まれたのは，1954年3月20日から5月10日まで豊橋公園で開催された豊橋産業文化大博覧会でインドゾウ（アジアゾウ）の曲芸が披露された時である（豊橋市役所，1954）。博覧会が，大成功で終了したことを受けて，動物園部分は残され，同年6月7日には豊橋動物園として開園している。動物園の主な飼育動物は，ゾウ（アジアゾウ），ライオン，トラ，クマ，ヒョウ，ニシキヘビ，ワニ（ミシシippワニ），ラクダ，鳥類など72種280点である。サーカス出身のアジアゾウ「豊子」は，曲芸が得意であったことで，市民に人気の動物であった（第5図）。飼育されているゾウが写っている絵葉書も発売された。ミシシippワニ，アジアゾウは，豊橋公園から現在の動物園の位置に移ってから生き延びた（豊橋総合動植物公園，2004）。

博物館とゾウ

豊橋市自然史博物館の新生代展示室には，ナウマンゾウの全身骨格レプリカが展示されている。この標本は，東京都中央区の都営地下鉄新宿線地下鉄工事中に地下22mの上部東京層（約15万年前）から産出し，組み立てられたものである（東京都高尾自然科学博物館，1985）。ナウマンゾウは，各地から化石が産出し

ており，今から約30万年前から2万年前の日本列島に広く分布していた。タイプ標本は，京都大学に保管されているが，そのレプリカが豊橋市自然史博物館にもあり，上顎第3大臼歯は郷土の自然展示室に展示されている。また，模式地近くから内山信一氏により発見された臼歯のレプリカも収蔵している。ナウマンゾウの模式地は浜松市佐浜で（Makiyama, 1924），発見場所は現在の佐浜町の信丘寺から八柱神社間の三方原台地の崖の下部と考えられている（土，1985）。浜松市には，ナウマンゾウをモチーフにした作品がいくつかある。佐浜町佐治川に架かる内山橋欄干にナウマンゾウのレリーフ（第6図），浜松市立広沢小学校（1983）が発行した『子供ふるさとかるた』には「ナウマン象化石の見つかる佐浜町」の絵札（第7図）や，でんでん虫の会が1985年に発行した『ふるさとのかかるた浜松』に「ナウマン象佐浜の里に出土する」と詠んだ郷土カルタがある。また，浜松市博物館には，北海道中川郡幕別町忠類産のナウマンゾウの全身骨格が展示されている。



第6図. 内山橋欄干のナウマンゾウのレリーフ。



第7図.『子供ふるさとかるた』の絵札（な）.

豊橋市自然史博物館は、「地球の歴史」と「生物の進化」をテーマに活動を続け、古生代展示室から新生代展示室への順路を辿ることができる。ゾウの仲間は新生代晩新世に出現し、中新世には100種以上が出現している。現在は、3種が生存し、ゾウは系統としては繁栄が過ぎた種群であり、種の多様性が低下していることがわかる。

輸入される象牙のなかには、ワシントン条約（「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」）に抵触する現生種（アジアゾウ、アフリカゾウ）のものが混じることがある。動植物種の生体以外の加工品である象牙の根付・印章もワシントン条約の対象となっている。象牙の断面にある縞模様はシュレーゲル線（schreger line）と呼ばれ、線の交差角が 90° 以下が化石、 115° 以上が現生種として区別できる。そのため、現生種とマンモス類の象牙の鑑定や識別の情報提供は、博物館の役割の一つでもある。

謝 辞

豊橋市美術博物館、豊橋市広報広聴課に所蔵している資料を提供していただいた。合わせて、お礼申し上げます。

引用文献

- 磯野直秀, 2007. 明治前動物渡来年表. 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, (41): 35–66.
- 磯野直秀・内田康夫, 1992. 舶来鳥獣図誌, 八坂書房, 東京, 143p.
- Makiyama, J., 1924. Notes on a fossil Elephant from Sahamma, Totomi. *Mem. Coll. Sci., Kyoto Imp. Univ., Ser. B*, 1 (2): 255–264.
- 益富寿之助, 1957. 正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究. 日本地学研究会館, 京都, 211p.
- 東京都高尾自然科学博物館, 1985. 東京で見つかったナウマンゾウ. 東京都高尾自然科学博物館, 東京, 6p.
- 豊橋市二川宿本陣資料館, 1999. 動物の旅～ゾウとラクダ～. 二川宿本陣資料館, 豊橋, 63p.
- 豊橋市役所, 1954. 豊橋産業文化大博覧会誌. 愛知県教育委員会・豊橋市教育委員会, 豊橋, 16p.
- 豊橋総合動植物公園, 2004. 動物園ものがたり. 豊橋総合動植物公園イベント開催実行委員会, 豊橋, 50p.
- 土 隆一編著, 1985. 静岡県の自然景観－その地形と地質－. 第一法規出版, 東京, 266p.